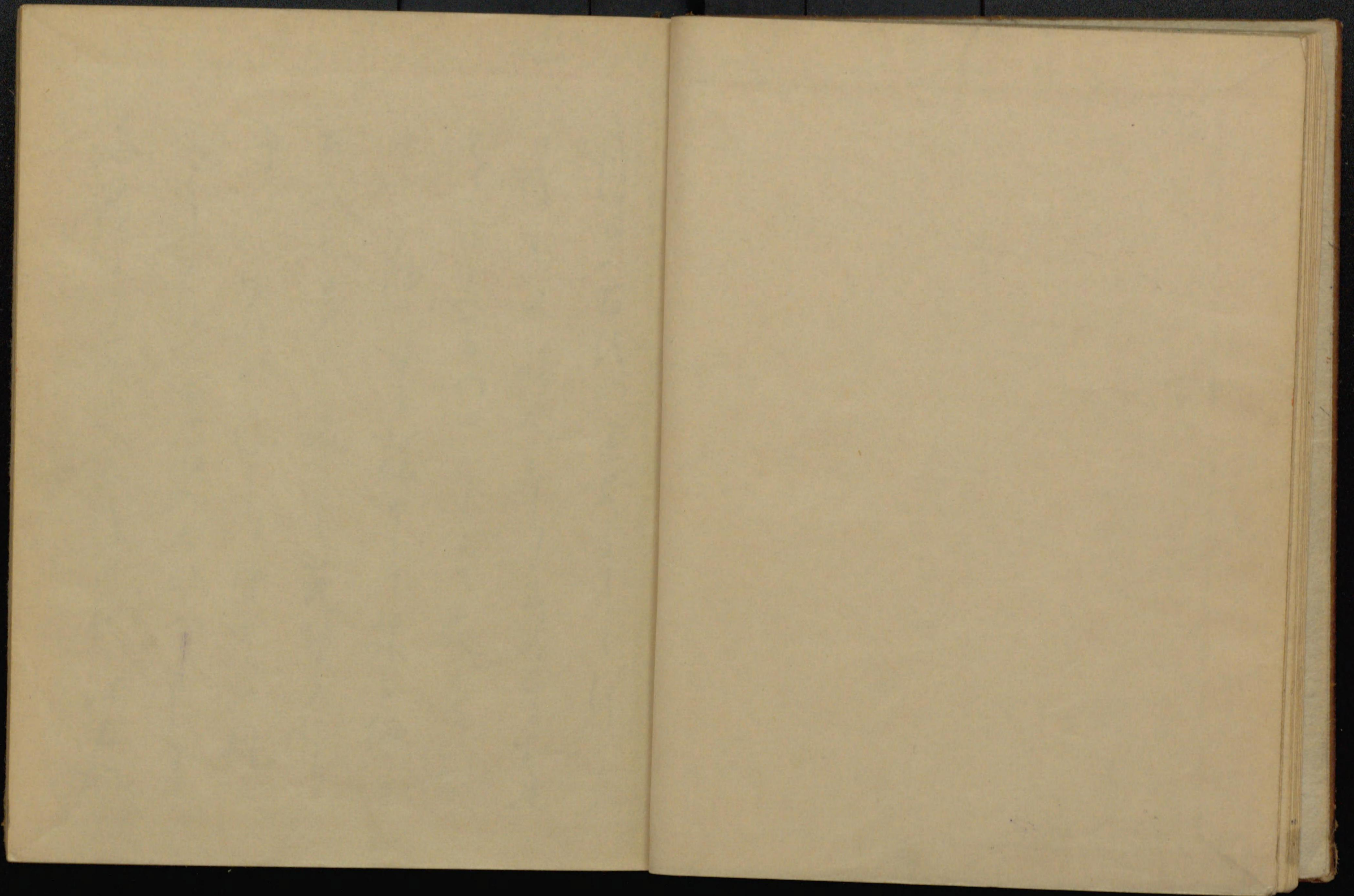


120
183

Handwritten text, possibly "183" or similar, written vertically in the center of the left page.



120-183
~~40-183~~



月日百代のさあしりてしるふ

旅人らうまのこゝろを

つるの口とてえたるを

しる旅とて旅を極とす

右人え多く旅を死せむなり

争ていつれのちり片雲の風よ

らうたれて漂泊のさびや戸す

海濱よさすまの秋江上の



破をりし一松の古葉をこらしめて
やいふもさきよきさる高のつらさ
白川の園に人とりくくちのおよ
けきいそりてくさるを池沖のよ
さよあひて取よのよよつりけ
引の破をつりし玉の縮付をえし
よ多すゆさし一松の月先回よ
しりしそ任る方人よ譲り秋風ら

別墅よ移る

草のきりも位替る代をひさのあ
面八句をさる此松よあまふ生と
未の七口明らけくさる躰こりて月ハ
左明らて光おさ下れらあうし
不二の草生よみそ上野谷中の
毛の梢又いつつこも心ほそひあ
さうもりいさかきりつとひてあ

紫へ道さあしゆとあふりて松
をたふれもあ途三千里の砂に
掬ふふさうりて幻のちまこり
離れの潤をさる

以春や高き岸 舟又月ハ潤
そをと笑立のゆりて 行道を
すまは人ハ途中ハ立あらし
てほりハのさゆるとハとん道はら

こちハ元禄ニらせり 和奥村長途
の以脚 只うりうあよといきちて
呉てよ白髪ハ根とまぬといふ
耳ハゆきていまこちハんぬさし
美生てゆりもと定ちうさ 粒の未
をふけて其日早加と云宿りり
せりり 美よりり 疲出月の角ハ
く水る物先くくく せしめすりり

しし出立侍を糸子一夜八夜の
防ふゆふ雨具等筆下のたらし
阿ふはさうりううの儀をこころさか
さすうのち控ううて後火の類と
うれうこふりりるる水

室のハ鴛は訪す同行曾えう曰此
沖ハ木のむはくや地の中とすて
富士一峰く無戸室よ入て焼あふ

らういのみ中又火こ出見のみこと
生れあふしうう室のハ鴛とす又
燈を讀むのし傳しめ謂也將
このまふとすふ面を禁す縁記
の音世の傳ふ事と傳し

元日日光山の林下は泊る阿ふし
ふふふふふふふを佛みおつと云
萬山をさうとすうふ人くハ

ト侍りし一夜の夢に枕を斬解く
体もあつと云いける佛の濁世塵土
よ示現してゆく業門の念願礼
こころの人をきこしげまふり
あつしのかすりよあつとそめ
ふらよ唯さ智さといふて正
正偏固の者也剛毅木訥の仁よ
とこそくくん気稟の清質をさ

ゆ



卯月知日清山よ清すは音は
清山よ二荒山よ書しよそ海
大原同基の野日老と改多ふ
歳未末をばそりあつとや々
清光一夫よこやそて同心次八荒
よあつた四民よ去垢よ極徳
於様多くして筆をばしよ

何〜き〜と昔月葉の葉又日め光
黒髪山にやれ〜してやさいよさ
白〜

判様く黒髪山り〜衣交常かん

常かんハに合出〜してさあ〜と云
芭蕉ノ下葉よち〜とあ〜して予ウ
新〜の方をきき〜して〜
松〜は家海の眺共よき〜

収以且ハ霧旅の難を〜して〜
旅立曉髪友を判て黒染よ〜
〜と〜物五〜と〜汲て家悟とす
仍て黒髪山の白と〜と〜
二字よ力け〜して〜

十餘丁山をきつて流と岩洞の
頃〜と〜流〜と〜百尺の岩の跡
潭と落〜と〜岩窟に〜と〜

入し滝の裏よりそれつうらふの瀧
とP傳し傳る也

暫時ハ流みぬるや夏の沖
那須の宮もねと云ふも知人あはれハ
そよりぞ感よううて玉るこり
ゆんとすきこみ一村をえんけりて
はは雨降日暮る農夫のまよ一
夜をうりて明れハ又野中を

ゆらとよ野飼のるあかり兼州
おのこよちけさい水ハ蹄まといへ
ととすすりハ情きぬまハ非とす
いすすくさやれとけ蹄ハ縦横
まいたてくるく友旅人のつと
ふまきしんあやハ結れハける
のこもる所もてふるまはしと
うし結らぬちいさる者増しよめ

たきいしてさうさ秋ハ小地ふて
各をわきよと云すアれぬ名ハ
ヤウシウハバ

さうよとハ筆梅子の名かすし 向う

故て人里よをれハあふれを結
つたよ結ひけてさうとゆふ

黒羽の館代津坊ち候しの方よ
音位よふしうあふあふし の宛に

日夜語りけて其才概おふと

云う胡ッ勤ふし自の家よ

之付して親属へさめてもふ

重目をもつてしよとに郊外

の道違しして大追物のあを

北道のの條系をわたりて玉三條めお

の古墳をいふアれふハ幅定よ

福与市倉の的を射し時おして

永玉氏沖正八幡とちうしし
け沖社にて結とすハ感應碑志
よりよきくらしききりハ桃梨宅
一
終驗克明寺と云有うこよま
孫れてけ者堂とて印す

文山は足跡とわむ首途外
當玉す岸古のたくり佛頂和尚

山根の記あり

堂横の五人の寺々々々々の居
むよ海とくわー一雨なううとハ

と松の山次しつ岩の書けつりといつ
うやましきふ具跡うんと雲岸
ちの杖を曳かんくすんで共の
いさういよき人あかくるのほと
千さうさてのわくす波柱下よる

山ハわくあさりしうまて谷を
ふこま松林思く苔をこりて卯
月の天今相を——十景つら
雨橋をとりて山門は入
さてうれあといいつくみえとよとほ
の山よふらりのあね石上の小菴岩
空座もむしうみふらり如祿仲の死
法中法師の石室をこりて

木啄も店はやあす友木立

とそりあへぬうを柱は結し
としり殺生石より館伏し
らうて道くく口林のあのと短冊
はをせしとえや——さるりをは
ゆりりのうふと

跡を掃よる章もけなほ

殺生石の温泉の出る山陰あり

石の毒まゝいさゝこちろひすず蜂
蜂のまゝくしちつ砂のちこのんまぬり
うさちり死す又清うまうさの
柳ハ芒と蹄一の室はちりて田の畔
よあすけ下の郡守さ部某の
け柳ハ女をもちやう柳くよのま
まうまふをいつくのりまやとま
しを今うけ柳のふけよこり

立りりたれ

田一牧植てまゑる柳ハ

心作あう口下まらうまう白川
の園はううて旅心定るぬい
都一と便求しと郎中
比園ハ三貫此一うし風流の人
心をうむ秋風を一身は
み葉を休して春葉の枯れ

何れ也卯の墓の白妙は次の
花の咲くはてしあるもこゝろ心
地すすゝ右人冠を正し衣襟を
改し事あると情痛う筆ももろい
まれしこゝろ

卯の墓そのまじりに園の情を

こくして勢りまゝにまゝく
川を流るた平なまはれをく

岩城相ふる三春日の二は常陸下野
の地をさうみて少くあるけい
らなをひらふ今のころやして
新しうまよる川の輝は等々
とらふよももろく日又日と
先卯川の美いよもろくやと
同女途のくまみ必心つれ且
風景を記しりこ懐の縁を

断てとくく——と云ふちうさす

凡流のゆやねくみの田植う

そとよろんともすうのよとゆねを

胸才ととつりて三巻とらうしぬ

け家の傍の太うある栗の木陰

とまのりて世をいとも傍を懐ひ

うめをふとくやと問はえられ

うのよきけゆる具詞

栗といぬ文字の西の木とて
西方浄土はありといひ是を
の一生杖子とねりともを
まといや

世の人々足舟なまや軒の栗

等穴躬の毫を出てス里中松皮の

病を離りてあさり山を路り

と——しあうり泥多し——川比

とや——進くまはいつせいのまを

美らこのはえろと人こはるれ
そ文知人ら一浪を尋人
こむらこくと尋らりさて世を
ふの流よこりぬ二女ねらう石子
きまき一里塚の岩を一見し
福徳よ宿るあぐれい志のふりら措
の石を尋て尋ふの山とよあ
途山陰の山里よ石ま土ま輝て
けり一里の山アのまりてあぐら
昔いけふのしよゆ一を往來の人の
羨まよあ〜して石をこ試付をこ
う〜てけむよつこさるや石の
西下さるよあ〜らと云こらる
〜こ〜や

早苗とらふりしや昔三つむす
月の掬のりしを越ししぬめよと

え宿は出川佐藤庄司より旧跡を
たの山際一里は中より飯塚の
諸野とすくはくはるまふと云
ふ一あるはるも庄司より旧跡は禁
ふ大日の跡とて人のきぬゆるまを
て洞をさへし又さるりの長ちよ
一家の石碑をみす中より人の
家へさるし先客や知られし
ふんくしき名の世はまふしつ物
ふと袂をぬしつら塗波の石碑し
まをさるしあすちよ入く茶を
乞ハハ実よ義経のき力奇をより
笑をさるしつ竹おとす

い及も冬の大月より北島嶽
大月知白のふせし夜飯塚よとま
る湯泉よりぬき入く宿をり

此の土産を、庭をなめてあめし
さし負ふ人の灯をなれたるらう
己の火をけりて、寝雨をいよるるて
外す夜をいへ、雷鳴雨をいよるる
降して、却る上より、きりきり
きりきり、眠りて、病病はら
いりて、清入中より、短夜の
まじりて、明けを又、旅の
程、夜の、全故にすすす、さうりて、
葉の、の、澤を、出る、さうりて、
未と、いよる、さうりて、病病、未と、
いよる、さうりて、霧、旅、追、土、の、行、脚、捨、身、
無常の、観念、道路、を、さうりて、
の、命、うりて、さうりて、柳、さうりて、
路、縦、横、を、踏、て、伊、達、の、大、木、
戸、を、さうりて、鈴、指、石、の、城、を、さうりて、

笠崎の郡に入ると、夜中ぬ実方
の塚、いつくのも、と、と、と、人よと
を、と、と、と、と、と、と、山崎の
里、と、と、と、と、と、と、と、
の、と、と、と、と、と、と、と、
叶此の五月、雨は、と、と、と、と、
身つ、と、と、と、と、と、と、と、
と、と、と、と、と、と、と、
お、と、と、と、と、と、と、と、

笠崎の、い、い、い、い、い、い、い、
名、と、と、と、と、と、と、と、

武隈、と、と、と、と、と、と、と、
根、と、と、と、と、と、と、と、
の、と、と、と、と、と、と、と、
法、と、と、と、と、と、と、と、
下、と、と、と、と、と、と、と、

の橋杭よりさうえさうさうさうと
まはまやねいげんしつとや
海より代へあつた代あつたハ橋
継ちよちよちよちよ今將之歳
のころそのおひてやうく
松のうしろよたん

武隈の松をとりて進松奉
とまの錢をさうりた

松よりねこの木を二月賦
あは川を渡して仙臺よ入あやう
ゆくりや猿窟をりらてアハ
進るすまは工かまつとまの
けり師つらう者やすてあう人
よあつこの者よ比さうあ
名さうらを考を修れとして
一日あつす宮城野の秋あや

あひて秋のまよとさしやしうし
玉田よりと蹄つるしう園あま
嘆こら也日影しりしぬ松の林
入て実をと木の下とまこころ
うらなゆりけさいふさふさ
こころとハナハナれ茶師堂天
の取仕やとねてもおはくれぬ
松崎地り江戸あし書りて送る
旦何の縁結つげう草鞋ニ
後すいれいふ風流のしり
實はありて具実をを致す

あやめ柳是は結ん草鞋の結
うの畫圖はまをてきとりり
なくの細るるふ際う十存
菱も今も十存の菱
を潤く園守を敵す

臺碑

市川村多賀城より有

つきの石ありし高り六尺餘横三尺中
を苔も穿て文字幽也四維國
界之敷里を三子此城神龜元
年按察使鎮守府將軍大跡朝臣
東人々所置也天平室字六年參
議東海東山節度使同將軍
惠美朝臣獨修造而十二月朔日

と有聖武皇帝の詔村より高水り
むししよりしんまを花おほく
於傳ふといへりし山崩川流てる
阿々た下り石ハ埋て土よりこれ
木は老てみ木よりしんま時移り
代更してしんまのしんまぬり
のしを實はしりて疑はるるしあ
歳の記念今眼ありし在人の心

を説すりし神の一は存命の
悦ひ四羈旅の方をとりしれい
泪もそほりしなり也

るれりし神回め玉川沖の名を尋ね
未乃松ふいちを造て未松山たぶ
松のちひくく皆墓をしめてをねを
うりし枝をつつらぬる終れ未も終
いづくのいとらふと出しと終りて

はくすの浦よ入ぬのうねをまみ月
るのうね神をれて夕月夜出は
難うゆりかとゆり世世のしあこ
きつして看りしいちをくまつら
てふりしいちをくまつら
いとく言をく其の夜月亡月法師の
悦びをくまつらいて奥よりいと云
りしいちをくまつらいて

神

ふもあ〜にふひき〜福ふ〜ら
として枕ち〜う〜れとさ
すうは色土の透風えれさるの
〜絆摺はき〜る〜地境戸
の明中、は法園守再興と〜れ
て宮柱や〜 彩椽〜ひや
うは石の階九段よま〜り朝のあ
るのま〜る〜や〜る〜るめ

果ッ登土の境戸て沖盡あ〜る
〜戸すこふ昔玉の風俗あ〜と
いと貴りれ沖前よ長ふ家破る
うぬの戸ひ〜のあは又作三年和家
之命奇進とと人百よよ木の侍
今日のおあ〜る〜い〜る〜らよ
あ〜渠の勇義我忠孝の士也佳名
今よる〜て〜る〜い〜る〜るがし

誠人能道と勤義とをすくし
名もなきこころとさふと云り日祝
年ふちうし船としりて松崎より
其間二里餘雄雉の歌よつ
柳とゆりまき水と松崎は投葉牙
一の好風うして凡洞度西湖を駆
て東南より海をい入て江の中ニ望
浙江の湖をききふつくの歌を

畫して歌りめハ矢を指ゆすりの
と波の圃園阿ふハ二をまうさなり
三をまうさしてたよいら右まつ
おろ肩負ふあり 抱ふあり 況孫抱す
うらうら 松の緑こまやうに投葉
し風よ吹くはうて 屈曲をのつ
きあらしうらうら 具まをて宵月
として美人の顔を粧ふちちと振

神のむうし大山すまのるさるし
もや造化のまよいつまの人の業
こころの詞をよきうけ

雄鴻、彼、北つて、海よ出さる
鴻く、まゝ、辰、源、師、の、ふ、堂、の、後
彦、禰、石、や、有、將、ね、の、本、院、を
世を、い、と、ぬ、人、と、稀、く、さ、る、ゆ、り、て
こ、ほ、種、ね、ま、か、と、け、り、あ、り、ま、す、ま、め

奄、田、の、住、ま、し、い、ま、る、人、と、も
ま、な、す、か、く、え、か、け、し、ま、す、か
か、と、は、月、海、く、く、く、て、空、の、路、を
又、あ、き、む、江、上、を、ゆ、り、て、家、を、こ
求、れ、の、意、を、い、く、ま、二、階、を、は、ん
風、空、の、中、の、旅、夜、す、ま、ま、と、あ、や
し、ま、ま、て、あ、ま、ま、や、比、お、ち、ら、れ
松、崎、や、病、の、身、を、ね、
常、良、
か、く、ま、す、

平ハ口ももちて眠んとしていね
らとてしり旧居をわくく時素堂
杉橋の詩りり原安適松くく
まよの和奇をと贈くく袋をと解て
こよの友とてし旦秋風濁子り
茶臼ちり

十一日瑞岩ちり清高ちり三十二
世の音ふ壁の平四節出れして

入唐写胡の伝用ふすくはよ
かき唐祿師の法化に依て七堂
夢見くして金壁之壯巖光を輝
佛土成就の大伽藍とハる水鏡り
彼見仏取聖のちハいつくもやとて
十二日平和泉とてし杉橋の松
杉くくんの橋ちとてし人跡稀
よ雉免菊菊菫の伝ふるく

ともいふ可路の路ありきく
 石の巻とツシ漆のちここの急峻
 とよみてちよる金花山海とよ
 えりし数百の廻航入はあつ
 一人家地を何くうにて電の
 煙をてまうとくさひうきす
 下もとま水をかゝ宿らんたれ
 こ文の宿する人ありし漸下り

小家は一夜を過りて卯辰を
 又くぬるまゝとひり絶めたり
 尾ゆりの牧場の若きうらた
 うよみてはさあつ地をひり
 うもははらうぬて戸俣と
 一宿して平家とむる其間在
 余里かきわたる也

三代の栄耀一巻の中ありて

大門の北に一里こゝろに有る香衝
うねの田跡より成て金鶏山のこ
形を海に下ると館のり水は
北と川南部より流る大河也
衣川の和泉城とありて館
の下りて大河の落入る康衝亦
旧跡の衣り岡を流れて南部の
ことありて其を衣と名づくともあり

備も義にすくゆては城りし
こりし一切名一時の美取より因破
きて山河あり城春りて草
まきこえりといふ丘なて時の
つる戸て洞をなすし作らぬ

交まらぬ兵ととも夢れは
卯の花より庭房々ゆり白毛の記

益て耳録りし二堂岡帳

可経堂ハ三將の縁をめぐし
光堂ハ三代の棺をゆり三々の
佛を安置す七室ありて
珠の扉風よやあり金の柱を
雪よ朽て既頽廢定座より叢
と成へるを四面新に圍て墓
を覆て風を後將時子歳
の記念とすられたり

六月雨の降くしつや光堂
南ア道をこまらりて山石の
里にゆる小里の陰より小嶋を
こてりりるの峰より辰前の美
みしりて出ぬの玉は慈んをす
け路旅人稀しありて
美ちのありしりて
閑をこり大山をのりて日

祝考りねも封人のふとらん
うけそ食らをも求む三日風雨来
てよりこころ山中小道通るす

巻風ふれ尿すす捲りし

何の云そより出ぬの雲
大山を仰てるささうさ
れもるささうの人を救て救
うししをささうて人を

杉と竹の究竟のささう及脇指
をよさうえ櫻の杖を推りてふく
先平を立てりささうあやあや
うささうあさあさ(さ)日分れ中
辛ささういをかささうはまつい
し何の云ささうのささう山
木ささう一鳥ささうささう木の
下開着ささうあさあさささう

雲捲もつらぬる比——て
隙の中踏しく水をうら岩
は激て肌もつらう汗を流
して室上のこはまがけふの
葉のきしおのこのえやくけら
必不用のきりまこ恙ををり
ま——とて仕合を——とらふ
まらぬ祈りまてさ胸らうら

のこ也

尾を澤りて清風と云をを
ぬりまハ富りのうねりこ志い
すす都みしおこらふい
すう子旅の情をし知らる
らうめて去途のつらりら
りてちり——結

涼しさを戎袍——てかまへ

遠出とてうひやりの下しひさの

きめとていを休りしておれの花

整頓する人々古代のもうちんふ

山祇領と立石ると云山ちや少

慈尊大師の因基りして浄清

宗の比く一見するさうし

のよもむら依てをむはた

と例てほりし其間七里とらり也

日いさしききす 禁の坊より

まて山との堂よのほり岩より

巖とて重て山より 松栢を四

お石とて若清り岩上の院く

扉を閉て地の音ききくす岸

とめりり岩を遠て仏閣をぬし

佳景空寂とて四すしひの

周りや岩よとて入野のたう

室上川のしんと大石田と云ふ所
田和を待た置り古の排濬の程
らりれてととれぬ美のむらとと
しき角一ありの心をやうとと
はるしとくらしとと新にや
道はうみととととととととと
ととととととととととととと
ととととととととととととと
ととととととととととととと

室上川はくらのつらつら出て山
と水ととととととととととと
おうらららととととととととと
ととととととととととととと
霞はあとの中とととととととと
ととととととととととととと
ととととととととととととと
白糸の流るる青葉の涼く

仙人堂岸の竹て立ちし

うらしてあぢや

六月雨をちつて早暮上川

六月三日羽里山の中を廻り

と云ふ者をもめて別高代舎をた

園利も湯す南谷のふり院

今して憐愍の情こころや

あし

四日午切をもちて俳諧具

と難や雪をもちて南谷

五日推現も湯當山用能除

大師下いつきの代の人と云ふ

とてて延表式も羽里山の中

社も書字黒の字を黒山と

かちまやねる黒山と申略

てお黒山と云ふや出ぬらつるを

鳥の先羽を以て回の首を獻ると
風上記より体とやせん月山湯各
を合して三山とて當寺或江東
叡の属して天台止觀の有力明
らうと曰く融通の法の灯りけ
りいて僧坊棟をとりて終に驗行
法を勵し一君山靈化の驗効
人き且ある繁榮長くしん

とくしんは山と謂ひし
八日月山とのりて木端をりて
よ引りけ室冠を以て包強力
と云りつるをいしりて雪霧山
氣の中は冰雪を臨てのりて
半一八里之より月行るのき聞
よ入るおやしめれ息絶るはて
項とよ録れと日没て有り死る

世を補心條を梳きして外に
明を以て口に出して空を清らして
湯を以て下る

谷の傍に鋤治少を以てまじふ
の湖に雲を以て描て雲子祭春
しと銀を以て山月山と銘を切
て世に賞を以て彼龍泉に到
と評しや千將莫邪のむしを

まじふ道に埃能の梳あし
子と云ふを以て若に梳きけ
たりやと云ふに之を以て
梳めつらと云ふにけり
後雪の下に埋て春を以て
まじふと云ふにけり
梅花を以て以てり

俗の市の氣に雲を以てまじふ

行々しうして是の如く山中の
徹酒ひきの法式うして他言
下とて禁すし候て筆とてしり
坊よりゆれし間周の帯より依
て山順礼の句、短冊より

涼—さやめのこり月つね里に
雲々常々あつて月つねの山
流るる水名は、

湯金山錢うむるを此洞か

羽黒をこえて鶴ら周の城下を山
民堂行くとて物入ぬの家よむ、
られた誹諧一卷有た去しむよ
さうね川舟よりきて酒田の漆
り下る訓、名不玉とて、
を指し

何れも山吹浦しりて夕涼

暑う日をと海にいそぐらう
 江山より陸より風を教を授けし
 今象浮の方寸を青負酒田乃俤
 ころ東北より方山を我磯と傳ふ
 いさこも少くして其際十里日影
 ア、ア、ア、以汐風を吹上
 雨朦朧として海のふくく
 周中より莫作して雨し又奇くと

とは雨後の晴色又折毎交と養
 の言をよ際をいきて多の晴
 をめしれ天候界て朝の美
 やうよこし出る程に象浮より
 うふ先能固定よりあををて
 三日出るの形をなすはむふの
 岸よりあををちたて花のよこし
 松の老木なり伝作

の法会をものこす江上よ山陵を
神切后宮より法墓とらふこと
千満珠寺とてはけりなり幸
ありし中いささかすなり
中より中寺の方丈をなして
藤を捲く風景一眼の中よ
あて南より海天をけりえ
其後うつりて江より西にわく
の園路をめぐり東に坑を築て
煉田よかふるふよ海北よりま
えそ流斤入る所をいし
之江の縦橋一里をり併ね橋の
うへて又異なりしね橋の如く
糸道にけりし
水けりしをくそえて北勢を
るやますよ似たり

多分はや 雨はふたつり 秋のふた
夕陽や 鶴もさうやれ 海原し

あられ

多分はや 料理にゆく 中々

ちんちん

うらやの商人低身

花のふたや 板をたふす 夕涼

あつち 雛鳩の巣をえん

ちんちん

はなもも びんぼうちんちん

あつち

酒田の金作りと 京へ北陸屋の

ちんちん 遠くふり 胸を

ちんちん 加賀の府まで 百廿里

とんちん 風の園も ちんちん 成る

のちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

暑湿のちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

五月廿六日 常陸花より
美海や佐波より来る矢に

今りの歌 一子さす大なり
約より一と五北国一の難下を
地てつれゆれと控りらるる
寝く一と一 一回降り西の方よ
よふ女のあつこ人中一ときさの
平光くつあつこのあつと変て

功海くつこつけい 我はめの玉所
深くあふ花あつ 伊勢方あふ
すくく 叶開き かのこのはら
つすか古てよ 一すくく
こくく 一くく 一くく 白浪
のくく 一くく 一くく
つすく 一くく 一くく
つすく 一くく 一くく

ぬ川をわたりて那古と云浦の
出振りの春の浪をさしよとも
沖秋の気とぬへりよとさ
人のあわれとせしり一里い
傳ひしとむらり山陰より
雲の首ゆきとすうらたをま
の二夜のちゆりよあつり
いとをとられたてこの世に入

よその香やから入るまはぬ
ゆの道山より谷をこえて
金比ハ七月中の五口く雲を
大坂より商人何まらぬ
まをれり旅宿をとります
一笑と云りげんはすうらな
かみよ世は知人も終
よらひのまに世をくして見

追々を催す

深し動けふ泣き多き風の風

あつきの名をいふるれりて

煉原の毎よむけや瓜茄子

途中吟

あうくよ口は難雨とあつきの風

小松と云ふ事

とをいふ名や小松吹葉

け處を田の沖にま流るる盛なり

甲冑の切なり 経音源氏なり

扇をいふ時義経と云ふるも

流るるやふしお士ののりあつ

目尻より吹返りまうて菊なり

草のりより金のとらひ龍頭

り歎けやいふる盛討死の心

木曾義仲頼朝なりけし

よみくればゆきし 樋口の法印
うはつう 中 せまのあさう縁
記 けし へし

むんや甲の下せきりす
山中の温泉より けしと根
ふ嶽清り けし へし ちゆむ
尾の山降る 観音堂あり 是
山の法号 けし へし の願れ

こきりさきをうけては 大慈大悲
の縁とあま置し けし へし 那谷
と名付るゆきや 那智谷地の
二字とあうちけし ときき
石くすくす 古松植る けし へし
菅ゆきり 小堂名の上り
さし けし へし けし へし けし へし

石山 けし へし けし へし けし へし

温泉に浴す且つ印を明に次へ

云

山中や菊の香をぬゆの句

阿しとすあゝ久米の物とて

いよい小童こねつ又誰語を

好む浴へ自室のまよのむり

室よりまより比以推し辱し

りしれは浴のゆへ自室のひん

ころりく世のころり切名の

ほげ一村判詞の料を清く

云今又むりし論のころりぬ

曾らんハ腹を病む伊勢の

園の傳と云ふ下よゆりあれを

先きてしりぬ

ちらん

しりくてもあれ伏し義の系

とち置たりりりりりりりりり

流りのうらうら 隻鳥のうら
たしよきまらうしり ちり又

今このうらや 本付清さんのま

大聖持入城分全昌寺のふ

ちりしとまらう ね加の比と

ちりしとおれ夜けちよしり

終有始風すやうのこ

と流す一夜の偏の室よ同

吾も始風をすてて衣察し

補と明りゆえゆく 清淨

多しむさうよ 鐘板鳴りて

食堂より入るに 臥ふの國

ことひよきしして 堂下よ

下ろしとまらう 傍し 紙破と

うらえ階のうらまら 追まら

所を度中の柳がれと

度掃く出さずやちよふ柳
さうらうぬささしつゝ、若き鞋を
うしろに於て踏ぶの境を踏
の入りをも、あま持てて沙
越のねとさるゝ

洛下月夜よけを

川とさるゝ沙越のね

け一首うて教景あうり

一辨こと加りりの、吾用の指を
えさうとら

在岡天龍寺の虫危古く、因
らうと君のうへ金頃の少技
といふりのうらうらとさうりて
けさうとさういまるあとの
風景さうさうひつげえ
所さうあさるゝ地さう

すのり 龍子よをよみて

おきてのりしに今もか

五十一丁山よ入て永平とて

道元孫師のゆきく 邦機

ありとて遊てくく山陰

後ものゆきく青い

とと

福井の三里半とて

とととて出くよき

後とて一 實よ守裁とて

右の隠士とていつ

江戸よりあつて

十とを餘りく

てまこりや將死

るゆれといき

るくとてあつ

引入てあやしの小家より
色らまのうえりて鶏頭を
すくよ産らるるをすさん
けくらよこふと門を和を
きまらぬの生ていつくが
いふまふららの坊やあ
けあしほしとるのさふり
ぬりし月あつとる多くとりふ

いれり書あましくしとる
むしし海しつとる風
情は竹れとやうてあふ
きのあや二夜とる
各月うつとるのさ
きん立等哉と共よとる
裾おうしつとる路の枝
あしとるれとる漸く

うくれて此那う言あうり
あさむつこの橋をわたりて玉は
のきまハ船くし生まうりう
の岸をとこて帰る危峰こく
知れも極う城うつらやま
よゆ一房とよすて十四日の夕
くれつらうの津り宿をと
りしむらめの夜月津橋うり

あまのよ代もくあうりうや
といこ越路の多ん狂明夜
の陰晴そくくしと何し
よ酒すうりくおてあいの明沖
よ夜糸かス仲衰矢守の津
廟や社頭中よいて松の木
の同よ月のかり入きうちうへ
の夕紗西相とあうりうし

徑骨遊り二世の上人大願
及發起のさうりてさうりま
と利土石とさうり泥濟と
うはうとてさうり流來の故
り古例今さうりす中前
りさうりさうりいさうり
花りの砂持とさうりさうり
のさうりさうり

月信遊りののり
十五日亭之の詞さうり
雨降

名月や小圃日和定ちう
十六日さうり雲
小貝ひらりさうり種
をさうり海上七里さうり
と云りの破籠小竹筒さうり

わらよとくしりさ皆僕あさし
あよとくしりさて 此風時の
まを吹まらぬ濱のりり
う海士の小家にて儂
うほ花ちりり 宴に茶を飲
酒をわらふて夕くれめさ
こしとて 貳は堤より

序 酒のたよりから 宿の状

浪のふらや小貝よきり
其日のつらき 等裁り
筆をさしとてちり
千路通とげみやとまき
てこのつとてはね弱よ
まをさしとて大垣の庄
入るちりらと何れより
まの合裁人もさしとて

了如行々ありし入集の前
川子前口父子其年そし
言人、日夜さうさひて後
生のりのりあふうとく且
悦ひ且いさゝる旅のあは
まといさゝやまももも月
六日とあれと伊智の近宮
おうきんと人あよりのて

絵の巻
あはれや秋

跋

うゝのきりもかきりも
しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ねくめ 福るゝ 4りては
りほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伏ゝ 村の 毛 別 一 放
籠を 記ゝゝゝゝゝゝゝ
りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

戸のあけり奇景をいりせんす
うけて百放の情は鏡人々
むこと弱よそりしり旅ちか
つちうらふふまけしはは
やの人のいさうよこをうて
眉のこゑのよれを

元禄七の初夏素紙に

此巻は古師芭蕉翁の紀行なりて素紙
に書きたる書の長身より寸許くも甲子七ふ紙
の書きめをよめ終る白紙を行成の長紙
筆のいと以てとらふ年預に金の赤砂ら
ししるる白紙よりうら奥の細くちと
書も月つる此のふかりては先く
後かしきふまよひえ縁七折んのふ
月事の方と偶存ししりてうくほの

えんしきまことまよふはく深くをきり
〜の国一〇七也は有難候なり
のり抄より照にまひぬとすされ
しきさきゆきひきりしきよは花をり
あいてしよ我やまひとすりや海日ら
鳥の求より一将をこよゆりしん
しきさきゆきひきりしきよは
うしきさきゆきひきりしきよは
書ハ

えんしきまことまよふはく深くをきり
〜の国一〇七也は有難候なり
のり抄より照にまひぬとすされ
しきさきゆきひきりしきよは花をり
あいてしよ我やまひとすりや海日ら
鳥の求より一将をこよゆりしん
しきさきゆきひきりしきよは
うしきさきゆきひきりしきよは
書ハ

まゝ〜〜〜〜〜
くろ〜〜〜〜〜
ち〜〜〜〜〜
手〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜
わ〜〜〜〜〜
お〜〜〜〜〜
割〜〜〜〜〜
語〜〜〜〜〜
付〜〜〜〜〜

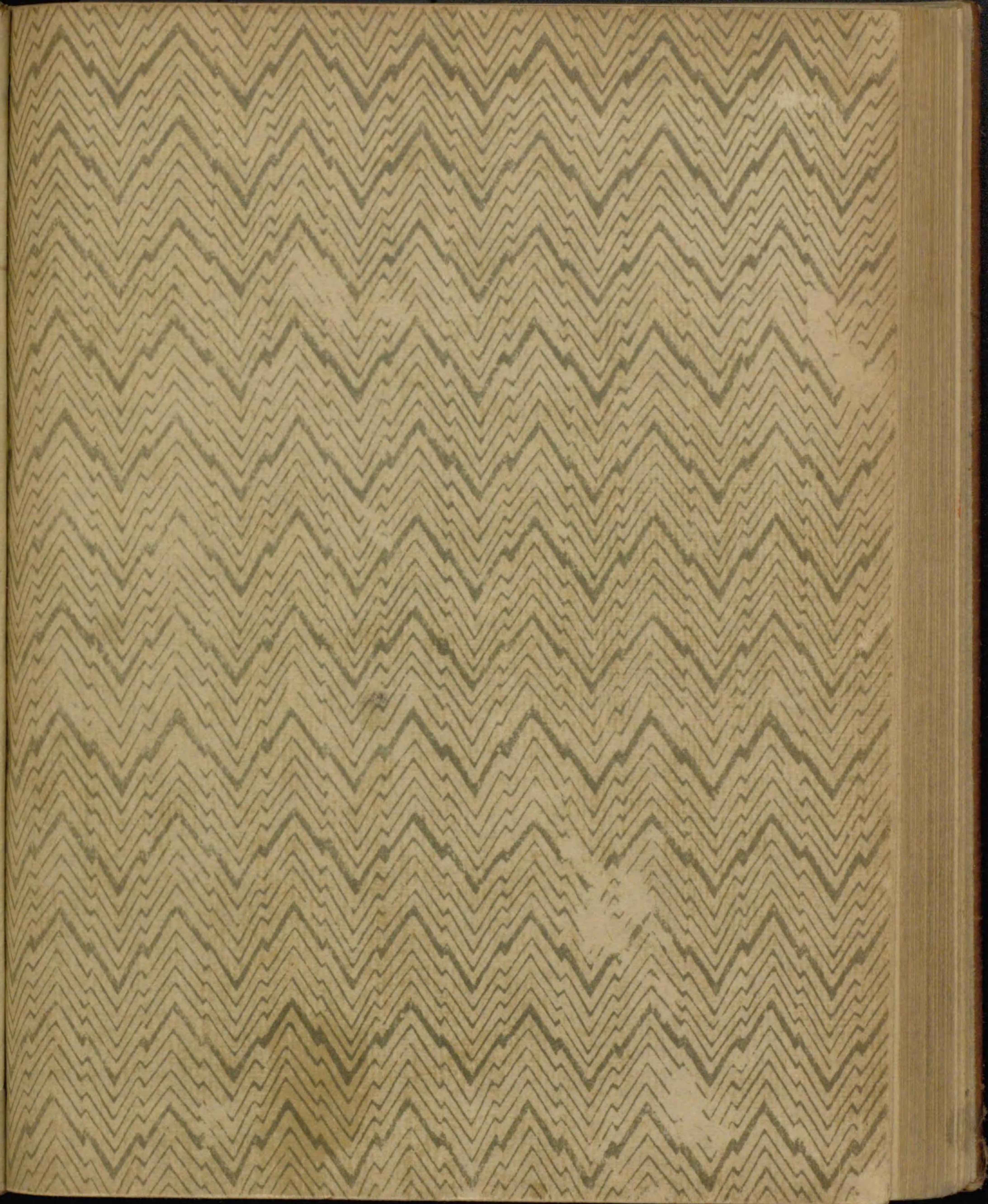
濡付の旅の衣

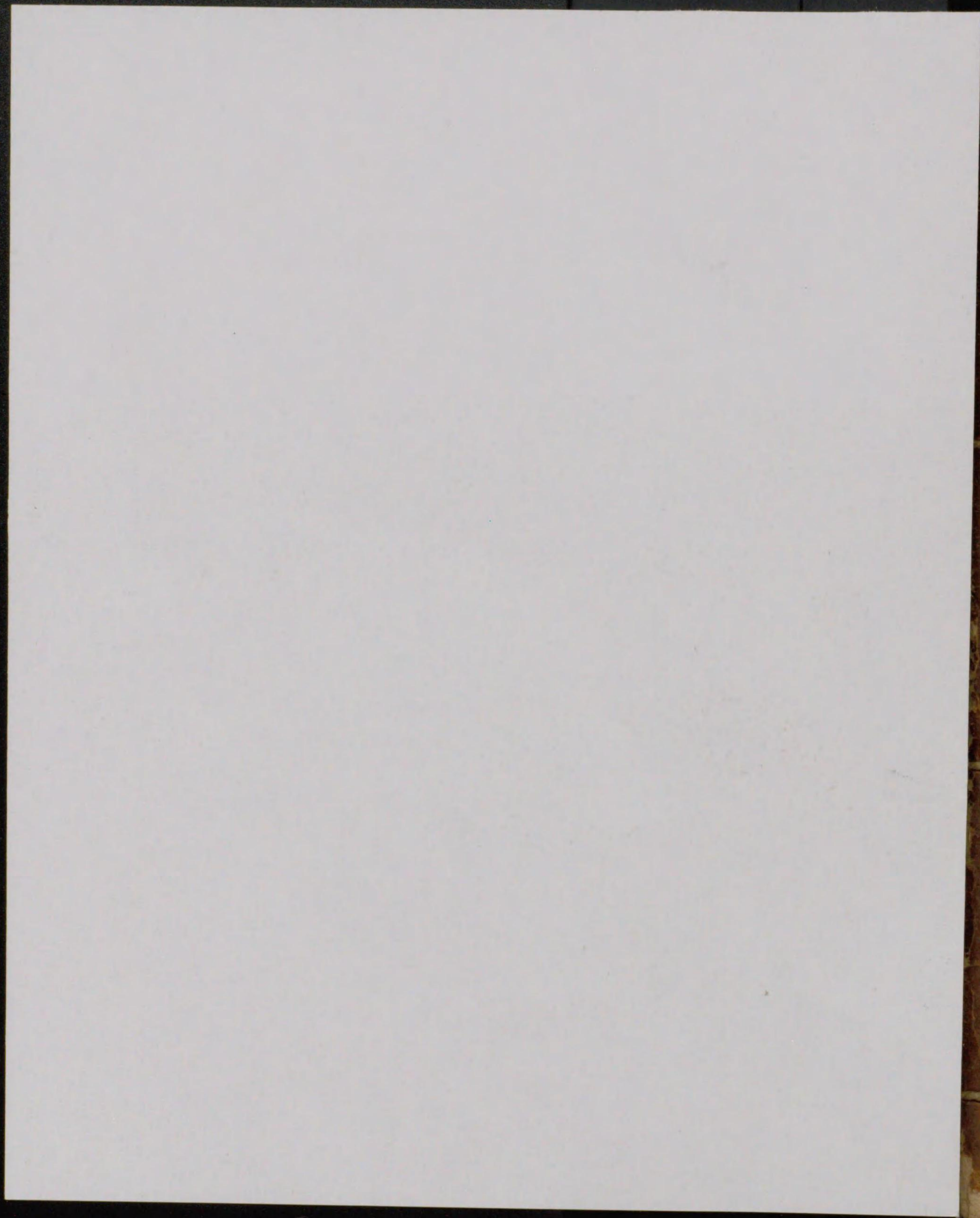
明生
去来録

元禄八乙亥歳九月十二日
於澁城落柿舎書写焉

120
183

120
183



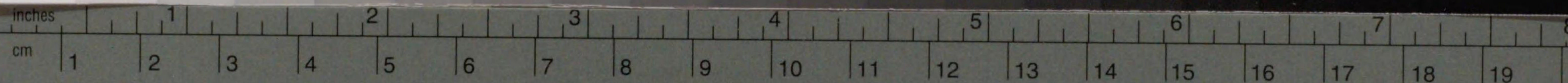


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

